

# みなとぴあ開館一五周年を迎えて

小林 隆幸

新たな施設が生まれる期待と不安が入り混じる複雑な思いで二〇〇四年三月二十七日、開館初日の朝を迎えました。考え抜き、前夜まで準備に準備を重ねた展示や体験用の設備に市民は関心をもってくれるのだろうか…。

その不安は一変します。娯楽施設でもない歴史博物館の前に、開館前から長蛇の列ができています。大勢の人たちが郷土の歴史や文化に興味を示していることに安堵するとともに、この人たちを館内でどう案内するか、うれしくも新たな不安が沸き起こってききました。初日の来館者数は約四〇〇〇人、



開館前に並ぶ大勢の見学者(2004年3月28日)

翌二十八日は約七〇〇〇人にのぼりました。初めて迎える来館者、しかも予想を超えた大勢の方々に対し、スタッフは大慌てで対応にあたりました。

## みなとぴあの誕生

新潟市歴史博物館みなとぴあの前身は新潟市郷土資料館です。昭和四十六年に解体復原された旧新潟税関庁舎がその施設になり、以来三〇年に渡って新潟市の歴史と文化を紹介する役割を担ってきました。重要文化財でかつ木造の旧税関庁舎は、空調設備が設置できず、観覧環境や展示資料の保管環境も好ましくないというえ、防災・防犯面にも不安がありました。さらに歴史資料を安心して保存できる収蔵施設もありませんでした。そのため昭和六十二年には、それに代わる本格的な博物館建設の準備懇話会が、早くも立ち上がっていました。

そして平成に入り、博物館建設の本格的な検討がなされ、構想・設計・工事を経て博物館法に基づく歴史博物館が誕生しました。県内ではすでに、豊栄市・長岡市・柏崎市・十日町市・上越市・両津市などに博物館が設置されており、新潟市はやや遅れてのスタートとなりました。

## 館を取り巻く状況の変化

開館から一五年の間に、館を取り巻く状況も変化しました。最初の大きな変化は新潟市の大合併です。開館一年後の平成十七年に、新潟市は周辺市町村と合併して市域を拡大し、平成十九年に政令指定都市になりました。市域の拡大は、「新潟市」と冠している歴史博物館の対象エリアの拡大をも意味しています。それによって旧市域を超えた広範囲の小・中学校から大勢の生徒が社会科学見学で来館することは喜ばしいことでした。一方で、館が直接関わる市域の歴史情報や文化財・歴史資料なども広範囲となり、スタッフの活動範囲も増えて業務量も増大しました。市民からの資料の寄贈も合併市町村全域に及び、毎年、数百〜千点もの資料の集荷や整理作業に追われています。

スタッフの負担が増えたとはいえ、館の活動範囲が広がることで歴史情報も多く集まるようになり、なによりも当館を地域の博物館として認識してくれる市民が増えたことは、館としてはプラスに評価できます。課題は、館の常設展示が旧市の歴史を対象につくられているため、合併後の新たな新潟市の歴史像を打ち出す必要があることです。

また、変化は市民にも感じられました。それは当館に限らず、地域の歴史・文化を学び、それを伝えるボランティアが増えたことです。みなとぴあの条例には「歴史を媒介とした市民交流を行うことにより、市民の社会活動及び文化活動に寄与する」という設置目的が示されています。市民交流・市民活動を標榜するみなとぴあは、開館当初からボランティアの導入を目指していました。

みなとぴあで現在、常設展示ガイド、敷地ガイド、体験の広場活動の三種のボランティアが在籍し、登録者数は一〇〇名を超えています。立ち上げ当初は、市内はもとより県内でも歴



第1回目のボランティア研修(2004年1月19日)

史・文化関係のボランティアの例は多く、手探り状態で、県外の事例や体験活動を実施している関係団体のノウハウを学習しました。そして活動方針や組織体系を固め、研修内容を決め、そのマニュアルを作成してボランティアの募集に臨みました。開館直後からデビューできるよう、ボランティアの研修は開館準備作業と並行して行いました。最初の研修会には一三〇名が参加しました。そして、それぞれの分野での研修を経て、観光客や新潟市民に地域の歴史や文化を伝える新潟市初のボランティア活動がここに始まりまし

以後、市内各施設で歴史・文化に関するボランティアを受け入れていきます。観光まち歩きガイドとして活躍している新潟シティガイドもその一つと言えるでしょう。その立ち上げの際には、担当者が当館へ視察に来ていました。

このように、市民の歴史を媒介とする自発的な活動が活発になっていくことはみなとぴあの目的にも適っており、館としてもこうした活動に役立ちたいと思っています。

## みなとぴあの存在意義

みなとぴあは市民に必要とされているのか。これは、館のスタッフにとって重要な問いかけで、館の存在意義もこの問いの中にあります。この視点を忘れずに行動することが、館を正しい方向に導いていくと考えます。



館が協力した浄足柵探索プロジェクトのパネル

ところで皆さんは、歴史博物館は歴史好きのための施設」という誤解を抱いていないでしょうか。少なくともみなとぴあは、歴史好きを増やしたり、歴史マニアを育てたり、歴史を教えるりすることを目的にしているのではありません。私たちの役割は、所蔵する歴史資料や人材を資源とし、博物館という専門の施設を生かし、協力してくれる方々とともに、市民に役立つ価値をつくっていくことだと考えています。年に数回開催する企画展もそうした価値をつくるための作業ととらえます。観覧者数に一喜一憂し、観覧者数が少ない時は当然気分も落ち込みますが、企画展自体によって得られた価値は消滅しないと思っています。

当館でつくる企画展は、地域の特色や先人たちの歩みをテーマに、関連する情報(素材)を集め、組合せ、新たな視点を加えながら構築したものです。開催は一時的なものです。企画展の作業によって得られた情報や生まれた成果は、開催後も利用されることによくあります。これは企画展の価値が失われていないことの一例です。浄足柵をテーマとした企画展の成果な

どは、東区の浄足柵探索プロジェクトにも活用され、企画展で制作した映像も東区プラザで度々上映されました。特に今年度は新潟開港一五〇周年であったこともあり、それに関連する「大新潟湊展」、「絵図が語るみなと新潟」、「にいがた 船と港の一五〇年」などの企画展成果が数多く市の事業やマスコミ、関連団体の事業に提供されました。そのほか、企画展担当者が講演・講座の講師や学校のゲストに招かれたりすることも多々あります。企画展に限った場合でも、こうした例から館の存在意義は、館を訪れたことのない方にもあると考えています。

市民にとってみなとぴあの存在意義は何か。それは人によって判断が異なると思います。これからの館の方向性を探るうえで、多くの方々の意見を聞かせていただきたいと考えています。

## これからのみなとぴあ

開館以来、みなとぴあは交流を大切にしてきました。これからは交流をさらに前進させ、館と市民がともに成長する協働が必要だと考えています。積極的に歴史・文化に関わるボランティアが増えたことでもその必要性を感じています。そうした意識が働いてか、みなとぴあでは様々なサークル活動が試験的に始まっています。もめん部・ワラ部・古墳部・よらい研究会です。それぞれの担当学芸員と市民のメンバーが集まって、楽しみながら技や知



もめん部(綿を植える)

識を高めています。特にもめん部・ワラ部など技術の習得が必要なものは、成長ぶりを共に確認し合い、それがさらに続ける活力になっています。こうした取り組みは、交流を通じて学芸員の興味と市民のニーズから生まれたものです。みなとぴあを舞台とした両者の積極的な交流活動として大切にしたいと考えています。

そしてこれからのみなとぴあは…。私たち館のスタッフも新潟市民です。日々の暮らしの中で理想を求め、自分を含めた市民にとってのみなとぴあ像やその使命を考えます。核となる使命とは、みなとぴあに関わる人たちに、館を通じて、地域の特色、良さ、誇りなどを感じてもらい、この地に生まれたこと、暮らしていること、訪れたことを良かったと思ってもらうことだと思います。そのためにみなとぴあは存在し、この使命に向けた活動を続けていくのだと考えています。

(こばやし たかゆき 副館長)